

---

# 死神のヘルノス

子猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神のヘルノス

### 【Zコード】

N1347F

### 【作者名】

子猫

### 【あらすじ】

俺は人と違つた物の考え方を持つてゐる。だから誰も俺を理解してはくれない。誰か俺を理解してくれないのか・・・。そんな俺の生活はあるときをきっかけに変わってしまった。

## 第一章・召喚

俺が普通の人とはかなり違つたものの考え方をしていると思い始めたのは小学校のころからだった。

俺が小学校5年生のとき道徳の時間に先生が、「道を歩いているときに困っている人を見つけたらどうしてあげるのが良いかみんなで考えましょう。」と言つた。

みんなが自分のプリントを見ながらじつと見えている間、俺はずつと窓際の席で外を眺めていた。ペンは置いたままだ。本当にどうしてこんな退屈な授業をするのだろう。よくこんな無駄なことにみんなは一生懸命になれるものだな。ぼーっとしている俺に先生が呼びかけた。

「隼人君～ちゃんと考へてるのかな？」と先生は俺に言つた。俺は無言のまま頷いた。何人かが俺のことを見ていた。つたく、いちいち反応するなよ。居心地が悪いじゃないか。しばらく時間が経つてから先生がまた話し始める。

「それじゃ～そろそろみんな考えられたと思つので発表してもらいたいと思います。じゃあまずは隼人君。」

俺は下を向いたまま言つた。

「僕、何もしません。」

言つたとたんにひそひそ話す声や笑つている声が聞こえた。このままだと変な疑いがかかると思つたからそのまま続けた。

「だつてその人のことをもし助けてあげたら自分のことなんかほつといてくれ、とか思うかもしれないじゃないですか。もしそういう人だったら助けない方がいいと思います。それに僕だつてもしそんなことをされたら自分でできるのについて思います。余計なお世話だと思います。」

すると教室内は静かになってしまった。その後、俺は先生に職員室に呼ばれて説教をされた挙句に放課後一人で掃除をさせられた。

これが俺の人を困らせるような意見だつた。でも、こんなことをいうのも小学校までで中学校にいつたらさすがに大勢の前でこんなことをいふのはやめ、自分の中だけにとどめて置くようにした。また居残りをさせられたり他人から変な目で見られるのも嫌だつたから。

それでも、誰かにいいたい、自分の意見を直に伝えたい、と思うときはひたすらノートに自分のいいたいことを書きまくつた。でも、そのノートも誰かに見せるわけでもなくて誰にも見つからないように鍵のかかる引き出しの中にしまつてある。これが俺の宝物だ。

中学校ではクラスの仕事をよくやるようになり、先生にほめられることが多くなつた。そして学級委員長として仕事をするようになり、周りから頼られるようになつた。人と話すことも多くなり、疲れる日も増えた。だんだんと人とも話したくなくなつて、親と話をすることがほとんどなくなつてしまつた。

部活動もやり始めた。小学校のころから足が速かつたので陸上部にはいった。種目は100mで、1年であるのにもかかわらず地区大会に出場してなんと優勝してしまつた。優勝したときは言葉では言い表せないほど嬉しかつた。誰にもこの幸せを取られたくないと思った。先生や先輩からも期待のできる一年のエースだと褒められて、嬉しかつたとともに不安にもなつた。もしも大会でいい結果が出せなくなつてみんなを失望させたらどうしよう・・・

中学校生活は辛い。小学校のこころとは違ひ、勉強にも気をつかわなければならない。塾にも通うよくなつた。

勉強、部活、クラスの仕事、勉強、部活、クラスの仕事・・・・・部活もだんだんつまらなくなり、手を抜くよくなつた。クラスの仕事も人と話すことも面倒くさくなつた。勉強も何もかも投げ出してしまいたい、全部終わつたしまいたい。

だが現実はそうはない。

毎日が同じ事、同じ事、同じ事。つまらない、つまらないの繰り返しだ。

なんか奇跡でも起こってくれないかと思つた。地震が起こつてもいいからなにか今の生活が変わらないかと思つた。だがそうなるわけがないと心の底ではわかつっていた。それでもそうなつて欲しいと思うのはそれほど毎日の繰り返しがつまらないと思つたからだ。

奇跡やありえあいことが起こるのを期待していると、アニメやマンガに出てくるような事に興味をひかれて、部活をサボつて家で過ごすことが多くなつた。学校から家に帰る途中にも毎日同じ通学路だとつまらないから道を変えて自転車で違う道を走つた。いつもと違う風景が俺の頭の中を駆け抜けると、何か不思議なことが起つりそうな気がする。普通の人の格好をしている人でも、こいつは実は魔法使いだとか、電柱の上から何か怪物が降ってきて俺の事を襲おうとしているとか、そういうことが起きないかと思つた。一度だけひたすら走りたくなつて、制服を着たまま夜まで自転車をこいでいたら、家に着いたのが夜中の11時になつてしまつたこともあつた。親に心配を掛けた所為で、その日から午後6時までが門限となつてしまつた。

俺は自分が間違つているとは思わない、どうして誰もわかつてくれない、誰か俺の言つことを聞いてくれる人はいないのか。そういう人が現れるのを期待していた。そんな人は現れなかつた。自分が信じられるのは、いいたいことをいっぱい書いた宝物のノートだけ。家族も友達も、普段は話しているが心の底では疑つていた。

「不平等な世の中だ。本当につまらない世の中だ。こんな世界、消えてしまえばいいのに。」

そんな事を思う日も多くなつてきた。

世界は消えないし、こんな事を思つていても何か起らるわけでもない。でも、ただそう思うことしかできない。自分が無力に思えてならない。だから、自分以外の何かとてつもない大きな力がこの世界を変えてはくれないかと思っていた。

ある学校からの下校中、いつものように何か起こらないかと思っていた。今日も魔法使いは現れないし、怪物が人を襲っているような摩訶不思議な光景にはお目にかけない。自宅であるマンションの門をぐぐり、階段を重い足取りで上つていった。

俺のマンションは3階建てだ。家は3階、つまり最上階なわけだ。2階から3階に上がるとき、電柱が俺の目線にちょうど映る。俺は何もしていのにくたくたになつてた。3階に着いたとき、なんだか良くなは覚えてないが、俺は何も居ない電柱に向かつてこんな事をいつていた。

「こんな苦しい世の中に居たくない。天使でも死神でも何でもいいからそのときがきたらその電柱で俺の事を待つてくれ。」

そういつたあと階段に座つて俺は一人、ずっと下を向いていた。ぱっと顔を上げたら電柱の上には天使が現れていた・・・なんてことはないよな。結局何も起こらないまま、俺は自分の家に入つていった。

俺の朝の始まりは、かわいい小鳥のさえずりが聞こえて起きられ るようなさわやかな朝ではなく、うるさい目覚まし時計と、母の怒 鳴り声だ。顔を洗って着替えを済まして朝食を食べ、いつてきます、 という。今日もいつも通りだ。ドアを閉めて、昨日の電柱をみた。 天使は・・・そこには居なかつた。

「いるわけ、ねえよな。」

思わず声に出してしまつた。誰にも見られなかつたけど、恥ずかしくなつた。走つて自転車にまたがり、全力でこいで俺は学校に到着した。

本来は遅刻であるはずだつたが、今日はHRの先生が遅いらしく、ラッキーだつた。俺が席に着くと、HRの終わりを告げるチャイムがなつた。もうすぐ一時間目が始まる。一時間目から数学だ。朝に弱い俺は、その日の授業が簡単な方程式や関数だつたとしても頭が全然動かない。数学が得意な俺だが、朝の一発が数学である日は大嫌いだつた。

授業が始まつても頭がボーッとしたままなので、窓際で空を眺めていた。今日はプリントで良かつた。授業がプリントだと、指名されて問題を解く必要もないし、プリントを解いていなくともこの先生はプリントを回収したためしがない。本当に今日はラッキーだ。朝の出だしもいいとその日はいい日になる、というのが俺の持論だつた。逆に出だしのが悪いとそれは最悪の日になるものだ。これは100mでも同じ事で、スタートが肝心だ。まあ、最近はその部活もサボつているのだが。

昼休みが始まり、俺は昼飯を友達と食っていた。くだらない会話で盛り上がっているとき、ふと目を廊下にやると部長の海山先輩がこっちを見ていた。あの目は明らかに俺を呼んでいる。仕方ない、行くしかないようだ。

海山先輩の元にいくと突然、胸倉をつかまれた。

「お前、いつまで部活サボってんだよー先生からも何度も何度も話があつただろ。家にも電話したんだぞ！」

俺は黙つたまま下を向いていた。その俺の態度が気に入らなかつたのか、先輩は俺を睨みつけてこういった。

「これで最後だからな。もしまだ何度もサボるようだつたらお前、退部しろ。」

ひどく冷たい声だった。逆上していたが、冷ややかに言われた。ああ俺はもうこの人から見放されたんだ、そう思つた。誰かに見放されるということはもう、その人の中に自分はないということだ。だったら、俺は先輩にとつて居てもいなくて同じ、空氣みたいなもんなんだろうな。でも、今日ばかりは部活に出ないと。たとえ見放されたからといつても部活をやめて入るところなど他にないのである。

から。

6時間目が終わり、俺は部室に向かつてあるいて行つた。着替えを済ませてストレッチをして体をほぐしていると、同じ100mプリンターの川崎が話しかけてきた。川崎は俺の小学校の時からの友達だ。俺の中では一番心を開けるやつだけど、最近は登下校をともにすることも少なくなつて距離が遠くなってしまった。

「あー今日は来てるんだね。やっぱ海山先輩や先生にあれだけ言われたらこなきやだよね。」川崎は同情するように言った。

「今日、昼休みにスッゲー海山先輩に怒られたから今日は来たんだよ。そうしないと

俺、部活やめさせられちゃうし。」

気分が暗くなってきた。最近は元から暗いのだが、先輩は本気で俺にああ言つたのだ。こんなことを思つるのはおかしいかも知れないが、あれだけ自分の言つたことを言えるところのは正直。ついひやましいかもしない。

部活は長くなってしまった時計はもう7時をまわっている。門限は守れないが、今日は部活があることを母も知つてはいるはずだから許してはくれるだろう。こんなに暗くなるまで外にいたのは久しぶりだな。上を見上げると空を雲が覆い始めている、10分もすれば雨が降り始めるだろう。早く帰らないと。

そして、マンションについた。昨日やり始めたばかりだけど今までの習慣のように、俺は下から電柱を見上げた。やはり何もないようだ。重い体を引きずりながら、俺は階段を上った。すると、電柱に何か黒い影が見える。胸がトクン、トクンとなっているのを感じた。もう一度みて見た。

すると、電柱の上にとまっているのは・・・カラスだった。なんだよ期待はずれだ、と思ったが当たり前だと思った。不思議も、現実離れした世界の事も考えるな、これからはちゃんと現実と向き合えと言われる気がした。これからはちゃんと向き合おう。この、つまらない毎日の繰返しと。

でも・・・でも、やっぱりそんのは面白くない！また昨日と同じように階段に座る。顔を伏せ、バックを無造作の放り投げる。体は久しぶりの部活の所為で、とても疲れていた。もつ本当に何もかもがどうでもよくなってしまった。こういうのが絶望つてものかな。結構・・・楽なもんだな・・・。

カァー、カァー！とカラスの声が聞こえる。なんだか眠くなつて来て、頭がふらふらする。

突然、声が聞こえた。

「昨日、俺様の事を呼んだのはお前だな。」

はつと意識が戻り、前を見るとそこには誰もいない。気のせいいかと思つたが、あたりをきょろきょろしていると、また声が聞こえた。  
「どこを探しているんだ。まったく、人間という生き物はのろまな上にとんまな奴らだな。」

今度こそはつきり聞こえた。声の主を探すと、そいつは電柱の上だつた。そこには俺と同い年かひとつ下くらいの年であろう少年が座つていた。

背筋の寒さと、魂を吸い取られるような感覚が俺を襲つた。

「お前・・・お前は一体なんなんだ！」

「なんなんだだと？人間はたまにおかしな質問をしやがる。俺様は俺様だろうが。」

おかしいのはこいつの方だ。大体中学生位の年の奴がこんな時間に、しかも電柱の上に座つているなんて、有り得ない。

「お前はお前とかそういうことじゃない！お前はどこから来た何者なんだといつているんだ！」

少年は一瞬消え、再び俺の前に現れた。

「あんまし生意気な口、聞いてんじゃねえぞ。人間が。一世紀も生きてねえやつらが俺にそんな口たたくんじゃねえ。こつから突き落とすぞ。いいか、よく聞いてろ。お前は俺を召喚した。人間界の時刻で言うと昨日の16時39分13秒にだ。その瞬間から今まで、俺はお前を監視し続けていた。そして、これからはお前のそばで監視することを決定した。」

そういうと死神はにやりと笑つた。

カラスが激しく鳴き、雨が降り始めた。

「それから俺様は、死神だ。」

雷鳴があたりに轟いた。死神の不気味な笑いが一層奇妙に聞こえた。

## 第一章・出発（後書き）

お久しぶりです。一章、お楽しみいただけましたか。  
感想もお待ちしております。

死神は、詳しく話しを聞かせてやるからお前の部屋へ案内しろと言つた。まったく、なんて礼儀を知らない奴なんだ。でも俺も話を聞きたいからまずは俺の部屋に行こう。

家に入るとおかえりといつてくる母に向かつて、

「ただいま、今田は疲れたからもう寝るね。ご飯はいらないから。」  
と言つて自分の部屋にはいつて鍵を掛けた。母はドア越しから、体の具合は大丈夫?どこか悪いところはないの?と聞いてきた。俺は大丈夫だよ、とだけ言つておいた。母親というのは無駄などいろでいちいかつむさい。体の具合とかは聞いてくるのだが、自分がいま悩んでいることとかにどうも鈍感だ。俺がどんなに悩んでいても肝心なところに気づいてくれない。

そんなことを思つていると死神は、

「もつと母親と話さなくていいのか」と言つた。

「そんなことはどうでもいい、とりあえずお前がなぜ現れたのかとかということ、なんで死神であるお前がそんな少年の姿をしているのかということを教えてくれ。」聞きたいことがありすぎる。頭の中が混乱していくほとんど理解できないだろうが聞かないよりはましだ。

「そうか。貴様の無礼な態度はひとまず許すとして、話しやすいことからはじめてやろう。まず、なぜ俺様がこんな格好をしているかだ。俺様は死神界にいるときはこんな姿はしていないので、人間界で本当の姿を他の人間どもに見られるとまずい。だから人間界で見つけたこの少年の姿だったら怪しまれないしお前との行動もしやすいだろうと思つてこの姿にしたわけだ。」

そこで新たな疑問がうまれた。

「ちょっと待て、ということはお前は俺と一緒に生活することなのか。死神のお前が。」

信じられない事だつたので聞いて見たのだが、

「監視するといったのだからそんなことは当然だろう。」と死神にはつまらなさそうに返されてしまった。

「そもそも監視とはなんなんだ。ただ人間についていくだけで、死神には何の徳もないだろう。」

俺がそう言つと死神は一度姿勢を正した。きっと重要な話だからだろう。

「それが俺様がここにきた理由だ。この世・・・つまり人間と死神と神がいる世界だ。神の仕事は世界そのものの管理、死神の仕事は人間たちの監視、というように分担している。死神である俺たちは、人間たちがこの世界をおかしくしないように見張つているんだ。」

「でも、それは人間全体を監視することだろう。どうして一人の人間を監視するんだ。」

「そこで死神が人間界に降りてくるわけだ。お前ら人間で死神を召喚しようと思うやつら、まあお前は無意識だから別だとして、そういうやつらは大抵この世の中は間違っているから世界を変えようだとか思うやつらか、ただ欲望に溺れている哀れなやつらだから、どちらもとりあえず重要人物として死神がつくんだ。そこでその人間が人間界を正してくれるやつか、それともただ人間界を狂わせたいやつなのか、死神が見極める。その判断が決まるまでの期間を監視と俺たち死神は呼んでいる。」

死神が話し終えるとしばらく黙り始めた。きっと俺に考えをまとめる時間てくれているのだろう。それにしてもなんだか複雑な話だな。この世の中がそんなふうにできていたなんて。人間はそんなことも知らずに生きているのか。

さつき言つていた死神が選んだという少年の姿を俺はよく観察してみた。少年の髪は茶髪で、年に似合わないだぶだぶの服を着てる。そのうえ、アクセサリーやらなんやらをジャラジャラつけてる。慎重は俺より少し小さいくらいで160cmとちょっとあるくらい

だ。

「お前が選んだか・・・あまり死神のイメージにはあわないな。」「当たり前だろう、周りに死神だといつているような姿をしていては意味がない。」そのまま死神は話し続ける。きっと俺の質問になど興味がないのだろう。

「次に、なぜ俺様が現れたかだ。人間界に死神が訪れるには人間が死神を召喚する必要がある。だがそれには一定の条件と召喚する人間の知性がそろっていなければできない。だがそれをお前はやつた。しかも自分がやつたという自覚がないということは異例なことだ。昨日のこと思い出してみる。」

俺は昨日の帰宅中、階段で自分が言つたことを思い出した。たしかに死神に現れて欲しいというようなことをいついていた気がする。

「思い出しだろう。そのときから俺は人間界に召喚され、お前を監視することになった。現在、人間界にいる死神は俺様だけだ。昔は死神が人間界に召喚されるなんてことはしょっちゅうあつたのだがな。最近では死神の存在を信じるやつも少なく、召喚をする術を知つているやつなんていないからな。最後に死神が召喚されたのは1500年以上も前の話だろう。」

死神は術といったが、俺が昨日言つたのはただの独り言でなにかの呪文でもなんでもないはずだ。一体なんでそれが死神を呼ぶ様なことになつたのだろう。でも、今はもっと別に聞きたい事がある。

「死神は人間の魂を取つたりするというじゃないか。それに俺と生活するといつても母さんたちに見られたらどうするというんだ。」

「その点に関しては心配は要らない。俺様は母が入院中のお前の従兄弟ということでここに住み、お前と同じ学校に通うという設定になつてている。それから、死神が人間の魂をとるというのは本当だが、それは死神がついた人間が死ぬときだけだ。他の人間の魂はどうと思えばいつでも取れるのだがな。」といって死神は少し笑つていた。

頭の中がさらに混乱してきた。今までこいつが言つてきたことが本

当なのだとすれば、今日から俺はこの死神と一緒に住み、生活をともにし、同じ学校に通うということになってしまふ。それに、俺の従兄弟は一年前に事故で死んでいる。姿も形もまったく違うし、こんなことがあつていいのだろうか。でもこいつは死神なんだ。今までずっと期待してきたはずの「有り得ないこと」が一気に俺に流れ込んできて、わけが分からなくなつた。とりあえずはこの死神にその疑問をすべてぶつけてみよ。

「分からぬことが多いすぎる。一つ一つ答えてくれ。」と俺は死神に言つたのだが、

「それは少し待つてくれ。もうすぐ俺様がこの家にやつてくる時間だから。」と死神はわけのわからないことをいつと、姿を消した。

それから10分くらい経つただろうか。さつきまで話していた死神との会話の内容が頭の中をぐるぐるしながら、さつきまで起きていたことが果たして本当にあつたことなのだろうか、部活と勉強の疲れのせいで頭がおかしくなつただけではないだろうかと思つていた。すると、突然家のチャイムが鳴り、俺は飛び上がって玄関に急ぎ足で向かつた。母も一緒に出てきてドアを開けるとそこにはさつきまで俺の部屋にいた死神がトランクを持つて立つていた。

「こんばんはお久しぶりですね、伯母さん、それから隼人君も。」死神が話している間、俺はその姿を見ながらただ呆然と立つていた。死神を見た母は、

「あら～いらっしゃい晶君。待つっていたのよ。これからようしくね。お父さんが今転勤しているから、お父さんの部屋を使って頂戴ね。ほら、隼人も早く挨拶しなさいって。」立ち尽くしたまま何もいわない俺の背中を母は押した。

「ああ、こんばんは。」俺は半ばわけがわからなくなつていたが、取り敢えず挨拶をしておいた。

そして死神を部屋に案内し、荷物を置かせてからまた俺の部屋に死神をつれて戻った。床に座ると死神は口を開いた。

「そういうわけで、俺様はこれからはここに住むことになった。それじゃお前の質問に答えてやるつ。」

知りたいことがさらに増えて、どちら聞けばいいのか分からなくなってきた。

「とりあえず・・・なぜお前が死んだばずの従兄弟のかわりになつているのか聞きたいんだけど。」

「死んだやつの代わりに死神がなるというのは人間界に来る死神にとっては基本だ。お前の従兄弟が一年前に死んでいるというのは調査済みだし、親族のほうが一緒に住みやすいだろう。」と言つと、死神は眠たそうな顔をした。そういえばもうすぐ夜中の12時だ。というより死神も眠るのか。

「もう遅いから今日は眠ろう。明日は土曜日だから学校は休みだぞ。部活もないみたいだし。」

これで、明日もこいつから話を聞ける。死神はニヤリとして言った。「そうだな。明日は人間界を久しぶりにまわつてみるか。死神界からたまに見ていたのだが、人間の技術の進歩はたいしたものだな。1600年ぶりの人間界か。しかもこの国に来るのは初めてだな。この国は外国の文化が伝わるのが遅かつたせいで死神が訪れるということがほとんどなかつたんだ。明日はお前の世界についても話してくれる。」

死神は父さんの部屋に戻つていった。俺は疲れがたまつていたので、すぐに眠つてしまつた。明日からは死神との生活か。

土曜日。昨夜の雨も止み、朝露が葉を濡らしている口差しの穏やかな朝。休日といつものほいいもんだ。平田にあるようなやかましい目覚ましや怒鳴り声も、この口ばかりはない。目が覚めたがまだ起きる気にならず、うつうつとしていた。昨日は何時に寝たつけ？なんだかよく覚えて居ないな・・・まあどうでもいいか・・・。

「起きなくていいのか。」

誰かの声が聞こえる。誰だろう・・・父さんかな。

「お前の母親に起こすよう言われてきた。早くしないとお前の魂を持つてくれ。」

【魂】とこう言葉を聞いてはっと起き上がった。そうか、この声は死神か。

「ようやく起きたか。人間の体は不便だな睡眠や栄養をとらないといけない。俺様もいまは人間の体にいるからそればかりはしないといけないんだ。だからさつさと着替えて飯を食うぞ。」

そういうて死神は部屋を出て行った。死神に起こされるようになるなんて誰が考えたことだろう？貴重な経験・・・といつていいのだろうか。どちらにしてもあいつに起こされるのはあまり気分のいいことではない。せっかくの休日だからもつと寝ていたいのだが、そろそろ起きておかないと朝食が抜きになってしまふかも知れないのでさつやと起きて支度をしよう。

食卓について椅子に座り、パンを食べる。土曜の朝はいつもこれだ。普段と違うところはいつもはいる父さんの席に死神が座つていると気づいた。どうやらパンの食べ方は知っているらしい。だがこいつはジャムやバターを知らないらしく、何もつけないで食べていい。

「晶君、玉子焼きもあるけど食べないの？」と母さんが言った。

「はい、いただきます。」と死神は笑顔で答えた。やはり他の人間といふときは言葉遣いがちゃんとしているみたいだ。だがこいつは目玉焼きを手で食べようとしている。俺はジエスチャーで箸を使って食べるよつに呼びかけた。・・・そつが、こいつは日本が初めてだから箸の使い方がわからないんだな。一生懸命に箸を使おうとしている死神を見て、なんだかおかしくなつてきた。死神は日本は外国の文化が入つてくるのが遅かつたと言つていた。じゃあ日本の文化も知らなくても当然か。

食事中に母さんが俺たちに言つた。

「あなたたち今日はせっかく休日なんだからどうか出かけてきなさいよ。晶君もこの町を見てみたいわよね。」

それは既に計画していた。昨日の夜に死神に今日は町を案内するようになつたからだ。

「わかつた。遅くならぬうちに帰つてくるから。」

「買い物もちゃんと行つて来るのよ。」母さんはそう念を押して部屋の掃除を始めた。

「はいはいつと。」俺はテキトーに返事をしておいた。

朝食も食べ終わつたしそろそろ行くとしよう。

秋風が町に吹き、落ち葉を飛ばしている。もう10月の終わりになる。行く場所を特には決めていかなかつたので、適当に町を散策することにした。自分で言うのもなんだが、計画をしたという割りに行く場所を決めていないというのは無計画だと思った。それが死神に気づかれてはなかつたから、行く場所をちゃんと決めているかのように見せかけた。死神は自分からしゃべらうとしないので楽だ。服装は昨日あつたときと同じような格好をしていてアクセサリーをまたジャラジャラとつけていく。町を歩いていると、アクセサリー店のようなものがあつたので、死神に話しかけてみた。

「死神、お前はあんなものに興味があるんだよな。」

すると、死神は意外にも不機嫌そうな顔をして言つた。

「俺様はあんななんの意味のないものに興味はない。お前はたぶん俺様の服装を見てそういうているのだろうが、俺様のアクセサリーは普通のものとは違う。ちゃんと魔力を持つていて、人間に自分の姿がばれないようにくらましの呪文が掛けられていたり、危険から身を守るための保護の呪文を掛けたりしているんだ。あんなものと一緒にされては困る。それから【死神】という呼び方はいい加減やめる。」

そうかそれでこんなに不機嫌そうなのか、でもこいつの名前は知らないしなんと呼べばいいかわからなかつたので聞いた。

「じゃあなんて呼べば良いんだよ。」

「晶と呼べばいいんだろう。今はお前の従兄弟だから。」

晶か。本当はそう呼べばいいのかも知れない。だけど俺はとにかくその名前が使いたくはなかつた。死んだ従兄弟の名前を、俺に召喚されたからと言う理由で勝手に使つていい、この死神をその名前で呼ぶのが嫌だつた。ただそれだけの理由のはずなのに、怒りがふつふつとわき起こり、つい声が少し大きくなつてしまつ。

「晶と呼べだと・・・俺にとつての上原晶はもう死んでいるんだぞ！お前をその名前で呼べるかよ！」

そう、上原晶は死んだ。一年前に事故で死んでいるんだ。それなのに・・・今更呼べるわけがないだろう・・・。死神はそれを聞いたとたんにさびしそうになつた。

予想もしていなかつた死神の表情に俺は戸惑つてしまつた。

「すまなかつた・・・そつか、人間はそこまで死んだ者ことを思うのか・・・。俺様は・・・そんなことは考えもしなかつた。そういうことを考える習慣が死神にはないからな。」

なんて死神が言い出すから、俺はどうしたらよいか分からずにただ目をそらすようにした。死神も人間と同じような考えができるんだな。俺もきつく言い過ぎたかな。こいつも死神だしまだ人間のことが良くわからないのもしれない。別の世界に住んでいる奴にいき

なりこんなに言うのもひどかっただかな。

「そんなにきつく言うつもりはなかつたんだ。ただ、あんまり逝つてしまつた人の名前を使うのはちょっと抵抗があつて……でもそういうことになつてしまつたんだからそう呼ぶしかないよな。」

すると死神は少しあわてたようでこう付け加えた。

「そんな必要はない。俺様の死神界での呼び名を教える。本当はあまり言いたくなかったが、どちらにしてもいづれ教えることになるだろうからな。今教えてしまおう。」

そう言って死神は静かに深呼吸をしてから言った。

「俺の名前は【ヘルノス】だ。先祖は眠りの神【ヒュープノス】。」  
そういうと死神はだまつてしまつた。こいつは今、いつたい何を考えているのだろう。俺も話しかけられないから黙つていた。【ヘルノス】か、一体どんな意味なんだろう。それに先祖って言ってたけど【ヒュープノス】とかいうのも気になる……。

しばらくしてから俺はヘルノスに話しかけた。

「死神にとつての名前は重要なものみたいだな。普段はその名で呼ぶけど学校では上原晶で呼ぶことにするよ。」そういうとヘルノスもやつと話してくれた。

「そうだな……それがいいな。それじゃ、町の案内を続けてくれ。

「また、いつも死神の傲慢な態度が戻つてゐる。でもこの気分の転換の仕方がどこか人間らしい氣もするな。こうしていると本当にただの中学生みたいだ。

町を歩いていると突然ヘルノスが文献はあるか、と言つた。俺はすぐに町の図書館に案内した。図書館の中は少し暖かくなつてゐる。まだ十月の終わりだけど外はもう冬を迎える準備をしているかのように寒くなつてきてゐる。図書館に入ったとたんに、何かを探すよ

うにヘルノスはあちこちをまわり、やつと神話が並ぶ所で止まった。ヘルノスはそこで2時間以上も本を読み続けてその間、一切口を開こうとしなかった。そして本を閉じると、いきなり俺に話しかけた。「まったく、人間が書いた神話は嘘ばかりだな。神々の名前まで間違がある。」そういうと再び本を開き、俺に突き付けてまた話し始めた。

「ここだ。さつき話した俺の先祖の【ヒュプノス】のことが書かれている。眠りの神で、人間に対して憐れみを持ち、優しい神だつた。しかし、【ヒュプノス】が与える死は鉄のような心を持つている。神格は【死】ではなく【眠り】なのだが、ギリシャ人にとっての眠りは優しい死のことだから【ヒュプノス】も死の神だつたといわれている。普段は優しい方なのだが、人間が悪さをしようとすると容赦をしない。死神の代表のような存在だつたのだ。」

自分の先祖について話すとヘルノスはまた町を案内するように俺に言つた。全く、なんてジコチュウな奴なんだ。

腹が減ってきたので近くにあつたファミリーレストランで食事をした。俺はヘルノスに箸の使いかたを教えることにした。ヘルノスは覚えるのが早い。すぐに箸を使えるようになつた。フォークやナイフも使えるようになり、やはり人間とは違うなということを思つた。前に死ヘルノスが人間界に来た時はみんな手でものを食べていたらしい。だからそういう道具の使い方がわからなかつたのだそうだ。

食いついたり喋つたりしていたらそろそろ帰らないといけない時間になつたので買い物をして帰ることにした。買い物リストにあるものをかごに入れているとヘルノスが居なくなつていて。どこに居るのかと慌てて探すと、店のお菓子を勝手に食べている。こいつは何やってるんだ・・・。人間界に来るのならもう少し常識をもつておけよ・・・。俺は小声で言つた。

「ヘルノス、店のものを勝手に食べたらだめなんだよ！それをどうにか隠しておけ！」

ヘルノスは頷いてお菓子のざみを消した。死神にとつてそんなことをするのはたやすいようだ。だがこれ以上やられると困るのでお菓子を買ってやることにした。カメラに映つたりとかしていないといいのだけど……。

スーパーでの衝撃的な出来事の後、家に帰る途中にヘルノスが俺に話しかけてきた。

「人間界の菓子も昔より断然につまくなっているな。前に俺様が来た時なんて、菓子と呼べるのはほとんど無かつたから人間界で生活するのも楽しみになつて來たぞ。」そういうてヘルノスは嬉しそうに笑つた。頼むからもうあんなことはしないでほしいよな……。これでは本当に死神かどうかすらわからなくなつてくる。何も知らないただのガキのようだつた。

そんなくだらない会話をしていると後ろから自転車のベルを鳴らしながら走つてくる奴が居た。

「イケ～～～！池上～～～！池上隼人～～～！！」

この声は川崎だな。川崎は俺に追いつくと息を切らしながら話しかけてきた。

「やつと追いついた……あれ？隣に居るのはどちら様？？」

俺に話しかけて隣にいるヘルノスを指さす。

「ああ、こいつは俺の従兄弟で上原晶つて言つんだ。こいつの母親が今入院しているから、俺ン家に住むことになつてて、来週から俺たちの中学校に来るんだよ。」そういうと川崎もわかつたようで、ヘルノスに挨拶をした。

「俺は川崎駿つて言つんだ。隼人とは小学校から友達で同じ陸上部に入っているんだ。つてもこいつとくらべて俺なんかスプリンターとしては全然なんだけどね！」そういうて川崎は笑つた。ヘルノスも挨拶を返した。

「僕は上原晶といいます。これからよろしくお願ひしますね。」

そんなヘルノスの硬い挨拶の所為に、川崎はちょっと動搖した。そして、俺に向かつて囁いてきた。

「この子本当に隼人の従兄弟なの？隼人と全然タイプが違うみたいだけど・・・」川崎がそういうので俺がフォローをいた。

「こいつ、他人とは昔からあんま喋らない所為でこんな喋り方なんだよ。でも悪いやつではないから仲良くしてやってくれよな。」

そういうと川崎は納得したようで、一人と別れるために言った。

「そうなんだ～。あ、俺はこれから塾があるからここでねーじゃあまた学校でー！」

川崎がいなくなるとヘルノスが俺に話しかけた。

「友達ってやつか。良いやつみたいだな。結構仲がいいじゃないか。」

「そりゃ仲いいよ。だって川崎とは小学校の頃から友達だからさ。死神にも友達とかはいるのか。」

そういうとヘルノスはしばらく考えてからこいつ話し始めた。

「友達か・・・。仕事仲間で話すやつはいるな。でも契りを結ぶほどのやつはない。」

【契り】？いつたい何のことだろ？。するとヘルノスも気づいたようで説明をしてくれた。

「お互に信頼しあうもの同士の間では【契り】が結ばれるんだ。【契り】が結ばれると相手が危険なときや死が近くなつたときは必ずそいつのそばに自分がいる。また、【契り】によって魂のつながりもできる。つながりができる魂は死後の世界に行つてもそのつながりは保ち続けるんだ。【契り】は人間同士や死神同士、物とも結ぶことができる。だがなぜか人間と死神同士ではつながることができないんだ。」

【契り】か。俺にもそんなものを結べるやつが現れるだろうか。それより物とも結べるというのはよく分からないな。まあその人にと

つてとても大切なもののどうづ。俺の宝物のノートもそうなのかな。

「それじゃあ、逆に嫌いなやつはいないのか？」

「それは勿論いる。一緒に居たくないやつだな。でも俺様が思うにそういうた嫌なやつらだからこそいいところを見つけてやるべきだと思うんだ。お前はそうは思わないか。」

突然そんなことを聞かれるから俺は何も言えなくなってしまった。俺の学校にも嫌なやつらがたくさんいる。人をいじめたり、学校で悪さばかりしているやつらが大勢いる。そんなやつらにもいいところがあるのだろうか。俺は、そいつらのいいところを見つけられるのだろうか。

俺は気づいた。

そつか。それが優しい人なんだな・・・

嫌いなやつらでも少しのいいところを見つけられる、そうしてそいつを認められる、好きになれる。そういう人が優しい人なんだな・・・

・

家に着いてからその日はヘルノスと話をしなかつた。今日聞いた【契り】のことや優しさについてとかいろいろと考えることがあり過ぎたんだ。考えることが前より増えた。でも考える内容は前とはぜんぜん違う。毎日が退屈でつまらないと思っていたけど、毎日いろいろと考えている。これが成長するってことなのかな。

日曜日はヘルノスが部屋から出たがらなかつた。監視つてそんなに重要な仕事じゃないのかもとか思つてしまつ。ヘルノスはお菓子を食べながら部屋でじろじろしている。これじゃあ太っちまつぞ。

今は人間の体だということを忘れているんじゃないかな？

俺は一人で部屋でマンガを読んだりしながらこれからのことと思つた。

死神との学校生活。明日からとうとう始まってしまう。でも、今日いろいろあって、きっとヘルノスとはうまくできるだらうと思つ。わがままでジコチュウで勝手な行動ばかりしているけれど、時々見せる人間らしい行動から、本当はいいやつなのだと思える。これから起ることが悪くならないように願い、俺は眠つた。

俺はいつもの道を走っている。コンクリートの道を自転車で駆け抜けて、公園の中を突つ切つていく。道を曲がつてまっすぐ走ると俺の通つている学校が見える。校門を抜けて自転車を止める。自転車置き場には俺を待つていた川崎と・・・死神がいた。

ヘルノスと学校に行くのは初めてだからなんだか変な感じがした。ヘルノスを見るといつもは着けているアクセサリーが見当たらない。こいつ茶髪だから先輩たちに絡まれたりしないか心配だな。

「おはよう！隼人！」と川崎が元気に声を掛けてくれた。本当にこいつと一緒にいると元気にさせられる。朝にこいつの声を聞けないどすっと暗いままになってしまふ。時間が迫つてるので二人に言った。

「またせちまつて悪いな。もうすぐHRが始まる。早く教室に行こうか。ヘル・・・晶はクラスはどこになつたんだ？」

死神の名前を言いかけて危なかつたと思ったが川崎は気づかなかつたようだ。でもたぶん気づかれててもあだ名かなんかだと思うだろうとあとで思った。【ヘルノス】なんてあだ名を付けられる奴はいないだろうけど。

「俺は職員室に寄つていかないといけないから一人は先に行つて！」とヘルノスは俺たちに言った。日曜日の日にヘルノスに他の人と話しかけ方をどうにかしろと散々言つたから、こいつも前のような堅苦しい挨拶はしなくなつたようだ。これで他の人も困惑するようなことはないだろう。

「じゃあ行こうか駿。」と俺は川崎に話しかける。

「うん、早く行こうぜ！さもないと先生にまた怒鳴られちまつよ。」と川崎は笑いながら言つ。本当にこいつは毎日元気な奴だな。こいつからエネルギーをもらつて生きているような気がする。そういう奴はこいつ以外にいない。川崎は俺にとって特別な人なんだな。き

つと。

HRが始まった。ヘルノスは俺たちのクラスになつたようだ。たぶまた俺の監視をしやすいよつことかそつう理由だらうな。ヘルノスが自己紹介をしている。

「上原晶です。新潟から引っ越してきました。この町で生活をするのは最近になつてからなのでまだわかんない事だらけです。部活は陸上部に入ろうと思つています。よろしくお願ひします。」

ちょっと堅かつたかな。まあ死神にしてはいい挨拶つて感じだな。それにしても陸上部に入るつて?そんなことは俺には言いもしなかつた。みんながこの転校生に注目している。たぶんこいつの頭のせいだな。自己紹介が終わると先生が話した。

「みんな上原に親切にしてあげるよな。今日からこのクラスの一員なんだから。それとわからないことがあつたら学級委員長の池上に聞くといいぞ。あいつだつたら親切に教えてくれるからな。陸上部の一員でもあるし。」先生がそう言つとヘルノスがこっちを向いてきた。みんなからも視線を注がれてなんだか居辛い気分だつた。

一時間目は英語だつた。俺は授業中にヘルノスのことを気にしていた。黒板に書かれることをひたすらノートに写している。あいつも鉛筆は使えるみたいだな。英語の授業は本当に眠くなる。先生が言つていることが外国語どころか、宇宙人が喋つてゐるみたいに聞こえてくる。俺は死神と会話はしているのだけどな。今度は川崎を見てみる。あいつは真面目だからちゃんとノートを写してゐるみたいだな。俺はいつもノートをとらないから、ノート提出が近くなつたり試験が近くなるといつも川崎のノートを借りてゐる。こんなに不真面目そうな俺がどうして学級委員なんかやつていてるのかと言うと正直俺にもわからない。ただクラスで何か考えたり作業をするときになると誰もやろうとしないので仕方なく俺がやつていると先生が俺を「真面目に仕事ができる人」だと勘違いしているらしく、俺に学級委員を任せているようだ。でもこいつのつてやつぱり真面目なうちにはいるのかな。

そんなことを考へてゐるうちに一時間目は終わった。ヘルノスも特に変わった事をしていなかったようには見えない。ただノートをとる量が黒板に書かれていることよりも多かったような気がして他に何を書いていたのかとヘルノスに聞いてみた。

「授業中は暇だからな。黒板に書かれたことはすぐに書き写して教室に呪文を掛けていた。また保護の呪文とかをな。」

まったくそんなことをしていたのか。それにしてもなんで保護の呪文なんでものを掛けるんだろう。そんなに危険なものでも来るのだろうか。そんな事をするくらいなら、お前のその頭をどうにかしろと言いたくなる。他のクラスからまで注目されるじゃないか。

「一時間目は体育。授業はサッカーだった。ヘルノスと運動をするのは初めてだ。どんな身体能力を持つているのだろうか。見たところまだドリブル練習やショート練習では普通に振舞っているようだ。死神ならもつとすばやく動けたり人間では考えられないような動きもできそうな気がすんだが。授業の途中でヘルノスに聞いて見た。

「意外と動きは普通だな。本気でやるとやっぱりますいのか。」そういうとヘルノスは少し顔を赤らめていった。

「そうじやない。人間の体にいるとある程度の身体能力しか發揮できないんだ。しようと思えば少しくらいは空を飛んだり瞬間に移動することもできるんだけどな。」

なんだ。そうだったのか。俺がこいつに始めてあつたときもありつは電柱の上から瞬間移動のようなものをして俺も目の前に急に表れていたりしたな。これもつい一昨日のことなのだがもう遠い過去のように思えて来る。まだ、死神と生活を始めてから一日しか経っていないんだな・・・。そんなことを思つてはいるが、ヘルノスが楽しそうに話しかけてきた。

「それより見てみろ。俺を召喚できたお前なら見えるだろう。今結界が張られているんだ。もっと上を見てみる。」俺は上を見上げた。すると同時に驚いた。薄い緑色や青が混ざっているようなものが学校を覆うようにして空に広がっている。

「本当だ・・・これはす”いな。」

ヘルノスは満足そうにこう言った。

「人間界にいてもこれだけ呪文が使えるようになつたんだな。俺様も1600年前に比べればずいぶんと成長したもんだ。」

そう死神がいうと俺はこんな巨大な結界を張つても本当に大丈夫なのかと心配になつたので聞いて見た。

「前は姿を知られるとまずいからそんな格好をしていると言つていたのにこんなに巨大な呪文を使っても平氣なのか。」すると死神はすぐに答えてくれた。

「まず第一これが見えるものはまずいなし。それに人間界でもしこれが見えるものがいたとしても自分の目を疑うだろう。それに誰かに言ったところで信じてもらえるはずはないしな。前にも言つたように、本氣で今でも死神がいると信じているやつはない。今はお前がいるけどな。」

なるほどそういうことか。確かに空に緑色の結界が見えるなんて言つても頭のいかれたやつだとしか思われないだろうな。

「それから俺様がどこにいてもお前を見つけられるように学校にいればどこにお前がいるかわかる呪文を掛けておいた。」

まったくこれでは監視でなくストーカーをされている気分だ。死神にされているのだからこれは文字通り憑かれているというものだけれど。二時間目の授業もこれで終わった。三、四時間目も普通の授業だった。ヘルノスは退屈そうでとても授業に集中している様には見えなかつた。でもこいつの性格だからな。どうみても真面目タイプには見えない。そんなぬるい感じで午前中も終わり、昼食の時間になつた。

今日の給食はカレーとパンとサラダが出てきた。カレーは俺は結構好きでおかわりに何度も行つた。ヘルノスもカレーを吃るのだが、野菜には一切手を付けようとしない。カレーに入つてゐる人参やジャガイモにも手を付けていない。

「野菜はだめだ。なんだか体が受け付けないのでな・・・」

一応こいつも今は人間の体にいる。栄養を取らないといけないなら食わないとダメだろ。なので野菜を食わないヘルノスに俺たちは無理やり口に入れようとした。周りの人たちも笑っている。ヘルノスもやめろといいながらも楽しそうだった。

昼食が終わるとヘルノスが話しかけてきた。

「今朝HRでお前が学級委員をやつていると聞いたが、なんでお前のようなやつが学級委員なんぞをやつているんだ。」

この質問に俺は動搖した。俺はたぶん先生から見ればクラスの仕事を良くやってくれる真面目な生徒と思われている。でもヘルノスは俺のことを他人と干渉したがらない暗いやつだと思っているはずだ。だからきっとヘルノスは俺が人のために働く学級委員をやつしているのかが不思議なのだろう。

いや、それよりも俺自身が不思議に感じているのかもしれない。

俺は別にクラスのためにとかそういうことは考えていない。ただ、誰も何もやろうとしない、何もはじめようとしない、そんな空気が嫌いだからやつていいだけだ。俺は真面目な性格じゃないし、人のために働くのも人と話すことも得意じゃないんだ。ただこれまでしてきたことが経験として俺に身についている、自分よりも人のために何かをするという術は持っていると思う。だから俺は素直にヘルノスに言った。

「なんで俺が学級委員をやつているかか・・・。それは俺自身が知りたいことなんだよ。俺は人のために何かをするということの経験はあるが、別にそこまで好きなことじゃないんだ。」

「好きじゃないならなぜやることがある?やりたければやってやりたくないならやらなければいいじゃないか。」

そう言われると言い返しようがない。俺は黙つたままずつといすに座っていた。

しばらくすると廊下に海山先輩が現れた。俺が部活をサボらない

ようにならして待ち伏せをしているみたいだ。この前の土曜日もヘルノスといひうるあつてサボっちゃつたし……。つたく本当に面倒だ。

「おー、池上。お前土曜日の練習こなかつただろ。この前あれほど説教してやつたといふのに、いつたい何があつたんだ。」

「えつと・・・従兄弟が金曜に家に来て土曜はそいつを町に案内してたんです。」

「そりだつたか。でもちゃんと報告しなきゃだめだぞ。川崎もいるんだから友達通じてでも連絡をよこすようにするんだぞ。それからもちろん今日の練習にも参加するようにな。」

俺は無言でうなずいた。そんな俺を見て先輩はため息をつき、教室の中を覗き込んできた。そしてヘルノスを見つけるとまた口を開いた。

「あいつが転校生の上原か。陸上部にはいると聞いていたぞ。お前の従兄弟なんだってな。それにしても・・・体が細身で筋肉が少なそうだなあ。まあ、あいつも鍛えればお前のよつに細身で足の筋肉が強いスプリンターになれるかもしれないな。」

俺はそれを聞くと、それならヘルノスも俺と同じ種目を走るのかと思つた。それは別に構わないのだけどなんだかやつぱり・・・。

「それじゃあ俺も教室に戻るとするか。今日の部活は上原もちゃんと見学に連れて来るんだぞ。」

そう言うと先輩は歩いて行つた。

俺も教室に戻つて川崎と話した。川崎と話をするのは楽しい。こいつと話すのはヘルノスと話すのと違つて楽でいい。何にも考えなくても楽しくやれる。こいつは川崎しかいない。

五、六時間目が終わると部活の時間になつた。俺は川崎とヘルノスを誘つて一緒に部室まで行くことにした。ヘルノスが持つてきているのは母さんが持たせたジャージとタオルと水筒だ。

「部活か。お前らはつまらん授業の後に帰りもせず部活なんかに出ているんだな。めんどくさくてやめたりしないのか。」

まづい、川崎に聞こえてしまつただろうか。ヘルノスの愚痴の対象は俺なのに川崎に聞こえていたらどうじょう……。ところが川崎はそんなことを気にしていないように言つた。

「ははは。そりやあ練習はきついし毎日あるから辛くなるときもあるよ。でもそれを乗り越えて大会でいい成績をとれたときは嬉しいんだ。それは努力した人にしかわからない喜びだし、それがあるから俺は部活を続けられるんだ。まあ俺は大会で大した成績を残せたわけじゃないけどね。自己ベストを更新できたときとかが嬉しいかな。」

やっぱり川崎らしいな。ヘルノスなんて先輩にこんなことを聞かれたら部活にはいる前に追い出されてしまう気がする。

「そう言つものなのか。それなら俺も続けるようにがんばってみよう。」

ヘルノスも少しやる気を見せた。

着替えを済まして準備体操をすると海山先輩が俺とヘルノスのところによつて來た。

「君が上原君だね。陸上部は始めてかい。池上が練習をサボらないようにお前からも言つたやつてくれよ。」と先輩は笑いながら言つて俺を見てきた。

すると驚く事にヘルノスは硬い表情で、

「そんなこと自分で言えばいいじゃないですか。」と言つた。ヘルノスがこんなことをいうとは思わなかつたのでちよつと嬉しかつた。先輩はこの言い方が気に入らなかつたようで表情を一変し、怒つて練習に行つてしまつた。俺はこれが愉快でたまらなかつた。そして小声でヘルノスに言つた。

「ヘルノス、サンキュウな。先輩にあんなこと言えるなんてお前はすごいぞ。」

するとヘルノスはお前は何を言つているんだ?と言つたそな表情で、

「俺は別に何もしてない。ただ本当のことを言つたまでだ。」と

言った。

ヘルノスのことはわからないことがありすぎる。この数日間、普通に会話して、普通に生活をともにしていたが、こいつは死神で俺は人間なんだ。それに俺はこいつに監視されていると言つ。違うもの同士なのだからわからないことがあるのは当たり前だ。特に人間と死神といったおかしな組み合わせならなおさらだ。そんなことを思いながら練習に参加した。

練習はそれほどきついものではなかつた。ヘルノスも練習には全然余裕という表情だつたし、先生や先輩から注意されたことはすぐ直すことができる。むむむ・・・このままだと本当にヘルノスに負けてしまうかもしない。俺も練習はサボらないようにしないと。部活が終わつてヘルノスと一人で帰つた。川崎は塾があるからと先に帰つてしまつた。俺も本当は今日あるのだがサボつてしまおう。帰り道にヘルノスはおもむろに俺に話しかけてきた。

「川崎とは気が合うみたいだな。お前はどんな人となら気があうんだ。」

突拍子もない質問に俺は目を丸くした。川崎はいいやつだな。なにせ俺にとって特別な存在だし・・・。

「やっぱり・・・自分と違う人かな。川崎はよく喋るし、明るいやつだから。」

「人間なんてみんな違うだろう。少なくとも死神はそうだと思つが。それならお前はどんなやつでも好きということか。」

「そうじやなくてだなあ・・・。なんていうか個性のある人つてことかな。その人にしかない性格とかがはつきりと表れている人が気があう人かも知れない。」

「個性は誰にもある。お前が言つようにな川崎にははつきりと現れている個性があるがな。でもはつきりしないやつらだからこそ面白いところがあつたりするもんだ。そこが見つけられれば、きっと嫌いなやつなんていなくなる。そつは思わないか。」

またも俺は何も答えられない。こいつの言葉にはいつも混乱させら

れてしまつ。まあ時間はあるし少しづつでも考へるよにしよう。  
それにしてもヘルノスと会つてから考へることが増えたような気がする。前から一人で何かを考へるということはたくさんあつたのだけれども、どれもマイナスのことばかりだった。今はどちらかと言うとプラスのことを考へている方が多い。そつだ、久しぶりに宝物のノートに今思つてることを書いてみよう。

家に帰ると母さんがお帰りといつてきた。俺はただいまと返して自分の部屋に入り、鍵を掛けた。これで誰も入つてこないだらう。たんすの鍵を開けてノートを取り出す。そして今思つてることを書く。

学級委員をやつている理由・・・今日のヘルノスの先輩に対する態度・・・人の個性・・・

書くことは山積みになつていた。ヘルノスが来てからはまだこのノートを開いてなかつたからな。ひたすらノートを書き続けた。他のものは一切気にならない。俺はこの部屋に一人。誰にも見られないこの空間は結構気に入つてゐる。自分の思つていることつて、ただ思つだけじゃなく言葉にして書いてみるとそのことをもつと理解できるし、新たな発見にも繋がる。言葉つてたぶんそういうことのためにあるんだな。言葉がなければ自分の言いたいことが自分で理解できないだろう。書いてる途中にこうじうことを考へるときがあるのでそのことももちろんこのノートに書く。だからいぐらでも書ける。

一時間くらい経つただろうか。俺はまだノートを書いていた。ふとペンが止まり、考へていると声が聞こえた。

「さつきから何をやつていい。」

「わあっ！」と俺は驚き、ノートを腕で抱えて隠した。

「家に帰つてからというもの、親どうぐに会話もせず部屋にこもりきるなどそこまで大切な用事か。」

「別にそんなんじやないよ。ただ見られたくなかっただけで……。それより鍵をかけているんだから入つてくるなよ！」

「お前がそんなに怪しい態度を取るのがいけないんだ。それに俺はお前の監視役なんだから見るなどいわれても困る。それで……そ

のノートはいつたいなんなんだ。さつきから何か書いていたが。」

俺はこのノートのことをヘルノスに話そうか迷った。今まで親にも川崎にもこのノートのことは言ったことがなかった。でもやつぱり教えることにした。ヘルノスには隠すようなことでもないかもな。「これは俺の宝物のノートで中学に入つてから自分の思ったことを書いているんだ。具体的には人に言えないようなことかな。自分で考えるよりも何かに書いた方がいいと思って……。」

俺は言葉に詰まつたままだった。普通こんなことをいつたら馬鹿にされたり笑われたりする。なんでそんなことしてんの、とかそう思われてしまう。でもヘルノスは……。

「そのノート見せてみる。」

そのときのヘルノスの声は少し優しそうでいつもの不気味さを感じさせなかつた。俺は素直にノートを渡した。

「ふむ……。書きなぐつているな。いつもの字とは違つ、何かを伝えたいといつ気持ちを感じる。でもそんなことよりも内容がすごいな。【こんなつまらない世界で俺は何をしているのだろう】、【生きなければいけない理由はないのに生きたいと思う理由はなんだらう】、【この世で信じていいのは自分だけ。他には何もない】、【自分は生きている。理由もなく生きている。このまままでいいのか】、【】

俺のノートに書いてあることの一節を読みあげるとヘルノスは溜め息をついた。

「自分の生きる意味とかそういうことを考えているんだな。そういうことをここまで深く考えるやつは数少ない。だがこんなことを考えるのも今の人間には大切かもしれない。今の人間は死について考えることが少なすぎる。死を理解しなければ本当の生を理解するこ

「どうできない。」

「じゃあ俺にも生きる意味を教えてくれよ。俺だって目標とかそういうことは考えているつもりだけど・・・。やっぱり田先のことだけだと思うんだ。もっと先、人間の行く末、死について。どうやつたらわかるんだ。」

ヘルノスは俺を睨みつけた。

「そんなことを聞くんじゃない。それは自分で答えを見つける。見つかるまでどこまでも追い求め続ける。まずは死について理解して次に生について考えるんだ。それは自分で見つけなければ意味がないし、他人が見つけられることでもない。」

俺はその言葉を噛み締めた。でも・・・やっぱりわからない。生きる意味とかはよく考えることだけどまだその答えは見つからない。ただなんとなく生きている。理由もなく。理由はきっとあるのだとと思うだから今俺は生きているんだ。その理由を見つけろってことなのか・・・。

時間はどんどん過ぎていく。夕飯ものどを通らせず、自分の部屋でベットの上に仰向けになり、天井を眺めていた。しばらくするとヘルノスが部屋に入ってきた。お菓子の袋を持って。

「隼人、面白いことを考えた。」

「面白いことってそのお菓子で何するつもりだよ。それより夕飯食つたのにまだ食べるのかお前は。」

ヘルノスは少し顔を赤らめてまた喋り始めた。

「お菓子のことじゃない。それに甘いものお食べないと頭も体も働かないからな。お前ももつと食べた方がいいぞ。」

俺は少し呆れてしまった。死神はみんなこうなのだろうか。

「それじゃあ、一体なんの用だよ。」

「いや、さっきのお前のノートのことなんだがな・・・。これは俺が実際に試したことじゃないからどうなるかわからないんだが。前に話した【契り】について覚えているか。」

ああ、あの話か。たしか人間同士や物とや死神同志で結ぶるものだ

つたな。

「なんで今更そんなことを・・・。」

ヘルノスはニヤリとしている。まるで世紀の実験を始める教授かなんかのような目だ。

「前にも言ったように人間と死神は契りを結ぶことはできない。だが人間と物、死神と物は結ぶことができる。」

ヘルノスのいいたいことが俺にはまだ理解できなかつた。俺がノートと【契り】を結ぶということか。

「つまり俺様が言いたいのはお前がこのノートと【契り】を結び、俺もこのノートに【契り】を結ぶ。そうするとこのノートを仲立ちとして俺様とお前にも【契り】ができるのではないか、ということだ。」

突然のヘルノスのひらめきに俺は度肝を抜かれた。人間と死神が【契り】を結ぶ。それは仲立ちであつてもつながりができるだろう。そんなことが本当にできるのだろうか。でも俺がヘルノスと【契り】を・・・。

「なんだかよくわからない。でもこれは面白そなことかもな。よし!じゃあやり方を教えてくれ。」

俺の意気込みにヘルノスも満足そうにする。本当にできるのだろうか。

「じゃあまずは俺が【契り】を結ぶからよく見て置け。」

俺はたんすを開き、ノートをヘルノスに渡した。いよいよ始まるぞ。「まずノートを開く。ノートの場合はやりやすいのだけど、まず絶対条件を言つ。ノートに使う言語は必ず自分が最初に学んだ言葉を使うことだ。お前は俺様の言語は読めんが気にしなくてもいい。間違えた場合は消しゴムを使ってもいいがそれ以降必ず同じ消しゴムを使うこと。たまにそれで【契り】が切れる場合がある。次に書く内容だ。全部一気に説明するからちゃんと聞いて置け。」

### （物との契りの結び方）

- 1・自分と神に誓う日付も書く
- 2・使い方を書く
- 3・契りを結ぶと誓す
- 4・決まり文句を書く

「決まり文句ってなんだ。」と俺はヘルノスに尋ねた。  
「日本語に訳すとこうだ【あなたが私を信じている限り、私もあなたを信じ続けます。それは死後もけつして離れることはない、永遠のつながりです。】一語一句間違えるなよ。」

そういうとヘルノスは俺にノートを渡した。もうすでにノートに何か書かれている。死神の言葉のようだから俺には読めないけど。ヘルノスに言われたことを全部書き終えて、俺は顔を上げた。  
「全部書き終えたようだな。これで【契り】が結ばれたはずだ。」「何も変わったところはない気がするけど・・・。」  
といつて俺はノートを逆さにしたりペラペラめくったりした。特に変化はない。

「そうすぐに変化が現れるわけではない。でもすでに田では見えないつながりができるはずだ。」

そういうと時報がなった。もう1~2時になつた。

「今日も遅くまで起きすぎたな。もう寝てしまおう。変化は今まで現れないだろうし。」

ヘルノスは部屋を出て行つてしまつたが俺は何もいわずにその背中を見ていた。しばらくすると俺もベットにはいり、電気を消した。今日結んだ【契り】は一体どうなるのだろう。俺は本当にヘルノスともつながりができるんだろうか。わからないことが俺にのしかかってきて、疲れの溜まつたいた俺はすぐに眠りについた。

## 第五章・学校（後書き）

ほとんど更新していませんでした。お待たせしてすみません。今回の話は今後のストーリーに深くかかわってくるので、ぜひ覚えて置いてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1347f/>

---

死神のヘルノス

2010年11月14日09時41分発行